

カンボジアにおける教育開発の成果と課題

202211856

筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 1年 袴田裕菜

20世紀前半に列強により植民地化された国では、支配政策の一環として教育開発が行われた。植民地時代が終了し、各国が「経済的」に即立した後も、旧宗主国に対する経済的依存構造・文化的影響は継続した。そのため、教育の分野においては、旧宗主国の教育制度がそのまま採り入れられることが多く、これらは教育移植や教育移転と呼ばれる。このような状況をポスト植民地主義という。ポスト植民地主義においては、西洋型近代国民教育制度の影響が大きく見られる。このような西洋型近代国民教育制度は、その後の各国の価値観の形成や社会制度に対しても影響を及ぼしたと考えられる。その一つ例として挙げられるのがカンボジアである。そこで今回は、カンボジアにおける旧植民地の教育開発を事例として挙げ、その成果と課題について、**文化社会的機能**の観点から考えていきたい。

先行研究（植民地時代）

カンボジアは1887年、仏領インドシナに編入された。これ以前のカンボジアに学校制度はなかった。フランスの保護国となって以降、単発的に学校が作られるようになり、植民地後半期の20世紀にはいると本格的な学校教育が導入されていった。植民地政府によって設立された最初の公立学校は**理事官府学校**であった。6年間の初等教育が提供され、カンボジア人のほかに華人やベトナム人が多く在籍した。これと同じ時期、農村部に**地方学校**や**村落学校**も設立された。さらに同時期、学校設立前からカンボジアで伝統的に行われていた寺院での教育を発展させる形で**寺院学校**も誕生した。このような学校教育の導入は主に**フランスの教育様式**に沿って行われていった。そのため、一部を除いて、**教育はフランス語**によるものであった。

教育の「クメール化」

フランスの事象を扱った科目の廃止
→カンボジアに関する科目の設置

教授言語へのカンボジア語の採用

先行研究（植民地時代/1920年代以降）

この時代からカンボジア人の民族意識が徐々に形成されるようになる。カンボジア初のカンボジア語新聞が発行されたことは非常に意義深いことであるといえるだろう。さらに、教育開発においては、**改革寺院学校**が登場した。改革寺院学校ではフランス式の教育が行われたが、「伝統的な宗教教育のルネッサンス」がコンセプトとして挙げられ、**教授言語もカンボジア語**が用いられるようになった。これ以降、改革寺院学校の学校数と生徒数は急速に増大し、**初等教育の量的拡大**が進められた。しかし、教育を受けるのは男子に限られていた。

分析（成果）

これらのフランスによる教育開発がカンボジアにもたらした成果としては、フランスにより初めてカンボジアに学校教育がもたらされたことであると考えられる。植民地化以前、カンボジアでは学校教育制度は存在していなかった。そのため、学校教育の導入が最大の成果であると考えられる。また、初等教育の重点が置かれたことは重要であったと考える。基礎的な学力を身に付けるため、初等教育は欠かせない。フランスにより学校教育が導入されたことにより、より多くのカンボジア人が初等教育を受けることが可能になり、カンボジアの文化の継承に重要な役割を果たしたと考えられる。

先行研究（ポスト植民地時代）

1953年11月、カンボジアはフランスからの完全独立を果たす。これ以降、カンボジアの教育政策において目指された理想は、**教育の「クメール化」**であった。1958年の教育改革によって学校教育の場から植民地時代のフランスの影響を消す努力がされたが、それは容易ではなかった。1967年の教育改革によって学校教育の教授言語は**カンボジア語**とされたが、実際の教育現場ではその取り組みは徹底されなかった。その理由としては、教員がカンボジア語を教授言語として使うことに慣れていないことや、教科書や教員用指導書がカンボジア語に訳されていないことなどが考えられる。1967年7月に開催された国民議会において、**初等教育及び中等教育のすべての教科の教授言語をカンボジア語に統一**することが決議された。これにより、教育現場は混乱した。

分析（課題）

一方課題としては、文化的側面、特に言語の観点に着目したい。フランス式の教育制度の導入により、当初から教授言語にもフランス語が用いられていた。フランスから完全独立を果たしたポスト植民地時代においては、カンボジア語を教授言語とすることが目指されたが、それは困難を伴った。言語はその民族の価値観や文化観の形成において非常に重要な背景の一つであると考えられる。そのため、カンボジアにおいても、長期間にわたり教授言語としてフランス語が用いられてきたことを背景として、民族意識の高揚は第二次世界大戦前後となった。このようにフランス式の学校教育の導入は、ポスト植民地時代のカンボジアにおいて、民族意識の形成に非常に大きな影響を与えたと考えられる。

表2 各学校の学校数及び生徒数（1931～1952年）（単位：校、人）

年度	フランス・カンボジア学校			改革寺院学校	
	全課程制学校数	初等学校数	生徒数	学校数	生徒数
1930/1931	18	89	9,437	101	3,322
1932/1933	18	95	10,871	225	8,677
1934/1935	18	95	11,846	453	18,686
1936/1937	18	99	14,337	734	32,195
1938/1939	18	107	16,545	908	38,834
1940/1941	24	168	22,280	845	35,834
1941/1942	—	—	—	860	37,096
1942/1943	35	170	25,033	895	43,908
1943/1944	51	146	28,112	992	47,555
1944/1945	55	154	32,385	—	—
1945/1946	66	188	32,785	1,093	51,991
1946/1947	68	204	38,627	1,179	53,355
1947/1948	81	291	24,151	1,393	60,201
1948/1949	79	330	40,578	1,405	71,781
1949/1950	88	396	66,722	1,422	77,622
1950/1951	96	469	89,807	1,477	77,896
1951/1952	128	659	120,664	1,447	76,943

出典) Bilodeau, Charles (1955) "Compulsory Education in Cambodia", *Compulsory Education in Cambodia, Laos and Viet-Nam*, Bilodeau, Charles & Somlith, Pathammavong & Lê, Quang Hông, Paris: UNESCO, pp.65-66.

結論

今回は、ポスト植民地時代におけるカンボジアでのフランスによる教育開発の影響について、文化社会的側面に焦点を当てて論じた。そのために、まず植民地時代のフランスによる教育政策から概観した。植民地時代におけるフランス式の学校教育の導入は、カンボジアに初の学校ともたらしたという点で非常に重要な動きであった。一方、フランス式の教育制度の導入は、ポスト植民地時代におけるカンボジア人のアイデンティティの形成に影響を与えるなど課題を残す結果となった。この事例を踏まえて、西洋型近代国民教育制度は教育の普及においては非常に重要なものである半面、植民地の人びとのアイデンティティをどのように形成していくかが課題であったと考える。

参考文献

- ・平山雄大(2011)、「カンボジアにおける初等教育開発の歴史的展開①—学校教育の導入と拡大(1958年以前)—」、早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊19号—1
- ・平山雄大(2012)、「カンボジアにおける初等教育開発の歴史的展開②—学校教育の展開と崩壊【1958年から1979年】—」、早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊19号—2